

江戸城、そして名古屋城の銅鰐

朝日 美砂子

キーワード

鰐 銅鰐 名古屋城 江戸城 隅櫓 蓮池門 明暦大火 銅意 近江大
據

現在名古屋城には、十六点の銅鰐がある。そのうちの三対六点は、第二次世界大戦の空襲を免れ現存する隅櫓三棟の屋根に乗つており、それ以外の十点は、戦災で焼失した隅櫓と門の銅鰐である。十点はいずれも痛ましく焼損し、その内の二点は鰐のみの破片である。

十点の内の一はかつて昭和天守閣や御深井丸展示館で公開されており、また令和三年（二〇二二）に開館した西の丸御蔵城宝館でも三点を常設展示しているが（令和四年一月現在）、二点は未紹介である。本稿は、これら現時点で知られる名古屋城の銅鰐を集成するものである。あわせて、名古屋城以外の諸機関に所蔵される同種の銅鰐についても言及する。

一 名古屋城銅鰐とは何か

昭和二十年（一九四五）五月十四日に名古屋城を襲つた焼夷弾攻撃の直前、大天守には金鰐が掲げられ、小天守、諸櫓、各一之門には銅鰐が据えられていた。銅鰐は名古屋城創建時の鰐ではなく、明治四十三年（一九一〇）に当時の宮城、すなわち旧江戸城からもたらされた銅鰐である。

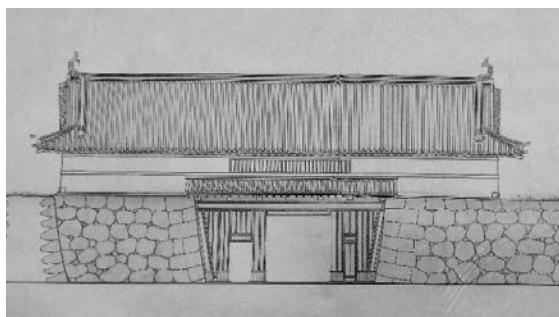
まず、江戸時代、名古屋城の小天守や櫓、門にどのような鰐があつたかを述べておく。なお、各建造物の創建時期については本稿では追及しない。

小天守の鰐に関しては、江戸後期に尾張藩士奥村得義が著した名著『金城温古録』に「鰐 亦 土瓦なり」（第九之冊御天守編之一小天守部）の記述があり、土瓦製の鰐があつたことがわかる。小天守以外の鰐について得義は文章としては触れていないが、縮図の中で、本丸の隅櫓三棟、二之丸の隅櫓三棟と太鼓櫓、西之丸の月見櫓と未申隅櫓、御深井丸の西北隅櫓の屋根上に鰐を描いている。各一之門、二之丸東鉄門、本町御門にも鰐を置き、鰐のない二之門類と明瞭に区別している。これらの鰐の内、本丸・御深井丸内建造物の鰐については、大正末年に宮内省が関連諸記録を整理編集した「名古屋離宮沿革誌」（宮内庁宮内公文書館蔵）に「瓦鰐」という文言があり、小天守と同じく瓦製であつたことが知られる。本丸・御深井丸以外の鰐も、おそらく瓦製であつたと考えられる。明治維新後名古屋城は陸軍省に管理され、本丸以外の建造物は破却され瓦鰐も失われたが、本丸は、明治二十六年（一八九三）陸軍省から宮内省へ移管され名古屋離宮となつた（『明治天皇紀』同年六月一日条他）。名古屋離宮は昭和五年十二月十一日に廃され（同日付宮内省告示第三七号）名古屋市へ下賜され、昭和二十年の空襲まで存続した。

離宮期の明治四十三年（一九一〇）、旧江戸城から蓮池門が銅鰐とともに名古屋離宮西南端の榎多御門跡に移設され、榎多御門以外の瓦鰐

も江戸城の銅鰐に替えられた。蓮池御門の名古屋移築については浅羽英男・鏡壯太郎によりまとめられているが、鰐についての論考はなく、経緯不明瞭の部分も多い。現時点で判明したことを以下に述べる。

二 江戸城鰐から名古屋離宮鰐へ



宮内庁宮内公文書館蔵「正門図面（仮称）部分」

旧江戸城から名古屋離宮への銅鰐移管に関する基本的文献は、宮内庁宮内公文書館所蔵「帝室会計審査局 帝室会計審査局録 内匠寮」（稟議書三 明治四十三年）等の、宮内省内匠寮が作成した公文書である。それらによれば、明治四十三年二月、内匠寮技手の安藤栄次郎が工事着手伺いを起案した。三月、移築費用の概算伺いが提出され、内匠頭片山東熊、工務課長安達鳩吉、主事三室戸敬光らが承認した。名古屋城榎多御門の石垣を全解体し、在来の石と新たな石を混ぜて改めて石垣を築き、道路も広げ、解体した蓮池御門部材を新橋駅から輸送し現地で組み上げるという大規模な改修であった。稟議書には三枚の彩色図面（挿図参照）が付属しており、平面図には枱形一帯に紙が貼られ土橋（橋台）東西の堀を埋め道路を拡張する図が描き込まれ、立面図には整然と積み直された石垣の上に立つ新正門と棟上の鰐が表されている。

なお、本来の榎多御門は西之丸西南端にあつた一之門で、枱形の東側南北方向

宮内庁宮内公文書館所蔵「帝室会計審査局 帝室会計審査局録 内匠寮」（稟議書三 明治四十三年）等の、宮内省内匠寮が作成した公文書である。それらによれば、明治四十三年二月、内匠寮技手の安藤栄次郎が工事着手伺いを起案した。三月、移築費用の概算伺いが提出され、内匠頭片山東熊、工務課長安達鳩吉、主事三室戸敬光らが承認した。名古屋城榎多御門の石垣を全解体し、在来の石と新たな石を混ぜて改めて石垣を築き、道路も広げ、解体した蓮池御門部材を新橋駅から輸送し現地で組み上げるという大規模な改修であった。稟議書には三枚の彩色図面（挿図参照）が付属しており、平面図には枱形一帯に紙が貼られ土橋（橋台）東西の堀を埋め道路を拡張する図が描き込まれ、立面図には整然と積み直された石垣の上に立つ新正門と棟上の鰐が表されている。

「名古屋離宮沿革誌」は、離宮内主要建造物についての陸軍移管から名古屋市下賜までの沿革を編年記載しており、たとえば建物番号「匠第五号」の西南隅櫓は、「明治廿六年 第三師団ヨリ受領」、「明治廿六年 白壁風損復旧」、「明治四十三年 瓦鰐ヲ青銅鰐へ取替 七月竣工 明治43年 経費簿抄録」と記されている。本丸の東南・東北各隅櫓、表一之門・東一之門、深井丸の西北隅櫓にも同様の記載があり、明治四十三年に江戸城銅鰐が移管されたことがわかる。原文書であるはずの「経費簿抄録」は現所在未確認であり、「名古屋離宮沿革誌」の記載が銅鰐移管の根拠となる⁽³⁾。

小天守については同書に鰐移築の記載がないが、小天守に銅鰐が掲げ

にかかっていたが、明治初期に撤去され石垣のみ残存していた。明治大正期、陸軍省や宮内省は、枱形から南に延びる土橋にかかる二之門（冠木御門）を「榎多門」と称していた。この枱形一帯は移築前年の明治四十二年に陸軍省から名古屋離宮に編入されており、編入時の建造物一覧表（前掲「名古屋離宮沿革誌」所収）には、陸軍省による榎多門（名古屋城期の冠木御門）の修理の年と費用が記され、「其修理保存上忽セニハセサルヲ以テ今ニ固然トシテ実用ニ適ス」と特記されている。榎多門は当時も「実用に適」していたのであり、おそらくは行幸を迎える正門としては簡素に過ぎるため蓮池御門が移築されたのである。なお移転にあたり既存の葵紋鬼瓦もそのまま用いられており、名古屋城瓦とまったく異なる葵紋鬼瓦の瓦当面一個が戦災をくぐり抜け現存する。

蓮池御門移築後の明治四十四年十一月、福岡での陸軍特別大演習を終えた明治天皇は、名古屋離宮に一泊された。江戸城銅鰐と葵の瓦が飾る

新正門の下を、御料馬車がくぐつたのである。⁽²⁾

「名古屋離宮沿革誌」は、離宮内主要建造物についての陸軍移管から

られたことは疑い得ず、同書の記載漏れと今は見ておく。

明治四十三年前後とは、御料地への編入後着々と進められてきた離宮整備が大きく進展した時期であり、明治十三年第三師団により御深井丸に建設された第二弾薬庫も、この年宮内省に移管された。昭和二十一年の空襲時本丸御殿障壁画を烈火から守った、通称乃木倉庫である。^④

旧江戸城の銅鯱を載せる七棟は、昭和五年、離宮の名古屋市への下賜にともない天守や御殿とともに国宝に指定された。そのうち東南・西南・西北の隅櫓は戦火をくぐり抜け現存し重要文化財に指定されている。小天守、表一之門、東一之門、東北隅櫓、そして旧蓮池御門である正門は焼失した。現存三櫓と焼失五棟の銅鯱の遺品が、本稿で取り上げる銅鯱遺品である。

三 焼損銅鯱は名古屋城のどこ鯱か

現存三棟の銅鯱以外の焼損銅鯱十点は、そもそも離宮内のどの建物にあったのか。鯱の一部には制作時や離宮への移管時の刻銘があるが、どの建物に載せられたかの情報は一切ない。

名古屋城に、名古屋市が戦前に撮影したガラス乾板写真、野帳や拓本、実測図面が大量に保存されていることはよく知られている。しかし、銅鯱の実測図はなく銅鯱に焦点を絞るガラス乾板も少ない。後述するように明暦という早い時期の銅鯱があり、何度も作り替えられた大天守金鯱より実は古格の遺品であるにもかかわらず。戦前の名古屋市は銅鯱を等閑視したらしい。江戸城の鯱は名古屋城の鯱にあらずという意識が働いたと思われ、この排他意識は実は今日も続いている。また焼損銅鯱の大部分が破損し胴部しか現存しないため同定は困難であるが、遠景写真を含

めたガラス乾板との比較から、別表のよう同定した。なお、ガラス乾板を納めていた旧木箱には戦後作成と思われる手書きの一覧表が入っており、その一覧をもとにガラス乾板のリストを公開してきたが、一覧に混乱があり表一之門・東北隅櫓・東一之門の鯱が混同されていることが判明した。^⑥

現存隅櫓三棟の鯱は、高所にあるため調査できず、令和三年に行つたドローン撮影による画像と過去の修理報告書に従つて比較検討した。

各銅鯱の同定理由詳細は煩雑にすぎ省略するが、不明瞭な遠景写真でも判断できる指標の一つが、耳と鰭（鰭を欠く場合は鰭跡）の位置関係である。早い時期（明暦万治年間）の作は耳が口の近くにあり、鰭は腹に近い。それ以降になると、位置が逆転し、耳が腹に近づき鰭が前に出てくる。また古いものは耳が縦長で、新しくなると横長になる。耳は、当初は龍の眉のごとく四角錐が連続して突き出るが、後には錐がなくなり人の眉に近くなる。また初期作は眉間が高く、人智を超えた靈獸の風格を醸し出しが、次第に人間じみた顔貌に変化する。これら視覚的な指標をもとに、外観観察による铸造方法如何も加味し、形式分類を試みた。

1 明暦万治型

下半身を欠き頭と胸のみ残る銅鯱一基（通番1、遺品番号①、口絵1）は、昭和天守閣四階で長く公開されていたが、詳細な紹介は本稿が初となる。頭部に「明暦三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」という簡潔な銘があり、明暦三年（一六五七）正月の大火直後の十月、銅意入道正俊によって作られたことになる。正俊は、大火後の江戸城再建における銅鯱制作を主導した铸物師である（伝記詳細は後述）。遺品①は頭部以外損壊しているが、ガラス乾板写真との比較から、正門、すなわち旧蓮池

御門の鰐と決定できる。銳角な四角錐を連ねて眉毛とし、眉間が高い。

また制作方法については、胴体部左右それぞれで型を作り鋳造する。

令和四年二月に開催された金属工芸史研究会において、加島勝氏、久

保智康氏らから、銘が弱く造形が硬いなどの点から明暦三年の正俊作をのちに模した作との指摘があった。

蓮池御門は、元禄十六年地震により損壊し石垣から積み直されており、鰐もこの時作り直された可能性がある。

この正俊単独銘遺品①と酷似する鰐として、尾まで残る鰐が二基あり（通番2・3、遺品番号②1・2、口絵2・3）、ガラス乾板との比較から、本丸表一之門に掲げられていた鰐一対二基と結論した。二基とも背と尾に銘があり、万治三年（一六六〇）二月、銅意法橋とその子渡辺近江大掾正次が作り、その旨を子の正次が刻銘したこと、明治四十三年三月東京城から移されたこと、移動には宮内省御用達の野田平吉が関わりその旨を田中嘉策が刻銘したことが知られる。田中嘉策なる人物は不詳であるが、野田平吉とは、明治四十三年時宮内省予算会議委員であった同省幹部長崎省吾（一八五〇～一九三七）の家に伝來した史料群にその名があり、東京の京橋に在住し土木建築諸金物製作に携わる、長崎家のお出入り職人であったことが知られる。^⑧

遺品番号②二基は、銘からは正俊正次父子の合作となるが、後述するように正次はいまだ十五歳であり、子を継承者とし家を存続させるための銘と考えられる。

なお、二基のうち、緑青が目から垂れ落涙のように見える遺品番号②表一之門北方銅鰐は、焼け焦げた木材と鉄板が胎内に残っている（図版参照）。移築にあたり棟に取り付けるため新調された部材と考えられ、

まさに名古屋離宮の遺品にして空襲の証人となる。また鰐だけ残るもの（通番4、遺品②1鰐）は、②1の腰鰐跡に一致しており、落下時の衝撃で離脱したものと考えられる。

通番11・12、遺品番号⑥1・2の二基は、重要文化財西北隅櫓に載る鰐一対二基である。「萬治三庚子年二月吉日 御鋳物師銅意法橋 同子渡辺近江大掾源正次」・「明治四十三年三月自東京城移之」という、遺品②と同じ正俊正次合作銘を有する。^⑨造形は表一之門に近く、明暦万治型の典型例といえる。西北隅櫓は、清州からの移築と伝承される三重櫓で、明治期に残っていた諸櫓の内、最大の規模と古格を誇っていた。

このように、明暦大火直後から万治三年までの間に、江戸の正俊・正次工房において複数の銅鰐が制作された。それらにはほぼ共通する様式、すなわち縦二分割式で鋳造され、丁寧に接合され、四角錐の集合としての眉を表し、耳が鰐より前にあり、正俊単独あるいは正俊正次合作の刻銘を有する鰐を、明暦万治型の鰐と仮称する。

明暦万治型のうち最も早い銘の作例が、明暦三年銘遺品①の正門鰐とを考えられる。すなわち、明治四十三年、名古屋離宮を管理する宮内省は、当時宮城あるいはその周辺にあつた銅鰐のうち最も早い銘の鰐一対二基を天皇の馬車をお迎えする離宮正門（旧江戸城蓮池御門鰐）に置き、その後に早い銘の鰐を天皇御座所たる本丸の表一之門と古格ある西北隅櫓に置いたと思われる。宮内省内匠寮が高い意識のもとに離宮管理を行つてきたことを、この点からもうかがうことができる。

2 小天守型

通番5、遺品番号③の鰐は、尾鰐の先端部のみの断片である。鰐先が広がらず連なるという特殊な形式で、計二十一点にのぼる江戸城銅鰐の

現存遺品中この形式はこの一点しかなく、そしてガラス乾板に残る小天守の鰐だけがこの形式を有する。

破片中央に貼紙があり、大半が破損しているが、下記の文字がかろうじて読める。

「慶長
宝名
大修復

昭和二十年五月十四日灰燼に帰る

「宝」・「大修復」の文字は、宝暦年間に行われた天守の改修を指すとしか考えられない。宝暦大改修を知る人は限られていたはずで、この紙片は、名古屋城の歴史に通じた関係者が、慶長の創建、宝暦の大改修、そして昭和の焼失を痛恨の意とともに記したものと考えられる。大天守の遺品として金鰐の鱗が焼損しつつも複数残存するのに対し、小天守の遺品は、未だかつて知られていないが、この断片こそ戦前の小天守を語る唯一の遺品なのではなかろうか。断片ながら張りがあり、小天守にふさわしい仕上がりである。

なお小天守鰐を接写した唯一のガラス乾板（図版参照）は、下から仰いだ写真であるため頭が大きく尾が詰まって見えるが、遠景写真には流麗な曲線を描く縦長の鰐が写っている。造形は明暦万治型に近い。制作方法は縦二分割にも見えるが定かではない。この形式を明暦万治型のバリエーションとみなす考え方もあるが、遺品③が小天守唯一の遺品であることに留意し、小天守型と仮称しておく。

小天守鰐は焼失前の実測図もなく、昭和三十四年の昭和天守閣再建

工事は、近接写真と次に述べる西南・東南隅櫓の鰐を復元の根拠としたらしい。今屋根にのる復元銅鰐は短駆に過ぎることを付言しておく。

3 横二分割型

焼失を免れ戦後重要文化財に指定された西南隅櫓と東南隅櫓の鰐四基（通番11～16、遺品番号⑦⑧）には、制作当初の銘はなく、明治四十三年に江戸城から移管された旨記す後刻銘のみがある。^⑩ 平成の西南隅櫓修理にあたった大川畠博文氏によれば、銅鰐は上半と下半を別々に铸造し溶接したもので、白目は金箔押しと推定される。また南鰐は大正十年六月の暴風雨で落下し修理されていたが、平成の修理において、名古屋城と所縁多い大谷相模掾铸造所により再修理が行われた。

令和三年のドローン撮影画像によつても、西南・東南隅櫓とも胸鰐が耳の外側にあること、耳が縦長であること、眉毛の突起が残ることなど、明暦万治型に属することが確認できる。しかし、鱗が鯉幟のようなる明快にして単調な図案に変容しているなど、形式化が目立つ。横二分割という铸造方法も異例で、明暦万治型を手本としつつも実制作年代は下る可能性がある。



「御本丸御書院渡御櫓唐銅鑄物鷲吻」部分
東京都立中央図書館蔵

万延度の江戸城再建資料とみなされている「御本丸御書院渡御櫓唐銅鑄物鷲吻」等（東京都立中央図書館蔵・甲良家文書、挿図参考）には、突起を残しつつ横に延

びる眉など西南・東南隅櫓と類似する鯱が描かれている。度重なる幕末の江戸城焼失再建にあたり、障壁画が焼失前の絵様にしたがつて急ぎ復元されたことはよく知られており、鯱も、古様を模して作られたと考えられる。それら再建鯱が明治期名古屋離宮に移管された可能性は高い。

4 縦二分割型

ここで謂う縦二分割型とは、鯱を縦に割った形で鋳型を作り、別々に鋳造し、鰭部分の金具で止めるもので、縦割り方法は明暦万治型と等しいが、基本的に金具によつて左右が接合され、バリの処理も甘い。半身のみの遺品が三点（通番6・7・8、遺品番号④、口絵4・5）、完器が二基（通番9・10、遺品番号⑤、口絵6・7）ある。いずれも腹鰭が耳より前に出ているため耳が傾き、眉は突起がなくなり曲線として示される。制作方法も外見も、明暦万治型とは全く異なる。

遺品④の半身三点のうち二点に「明治四十三年三月自東京城移之」の刻銘があり、ガラス乾板写真との比較から、東北隅櫓の銅鯱の一基及び半身と特定できる。三点ともすつぱり半身に分かれているが、内側に土が残り鰭もあるなど損壊の程度は低い。金具で止めるという成型方法のため、櫓の上という高所から落下した衝撃により容易に分離したのであらう。

⑤の完器二基は、晒布と生綿、麻繩で厳重に梱包し木箱に納め蓋を打ちつけた状態で、昭和三十四年にコンクリートで再建された正門上層渡櫓（正門櫓）に収納されており、本稿がおそらく初紹介となる。美術品専門業者による梱包とも思われるが、詳細は知られない。一基とともに「明治四十三年三月自東京城移之」の刻銘があり、さらに「五十二貫目」、「四十三貫目」と、それぞれの尾に刻されている。この重量銘は東一之

門銅鯱をとらえるガラス乾板写真に写つておる。東一之門の鯱と確定できる。五十二貫目とは約一九五・五kg、実際は一三五・一kg。四十三貫目は一六一kg、実際は一二八・五kg。明暦万治型の銅鯱完器がもし存在すれば同じような大きさながら二五〇kg近いと思われ、⑤は極めて薄手の作となる。

⑤の1と2は重量が異なるため一対ではない可能性もあるにせよ、制作時期と工房は同じであろう。一基ともに鋳肌が荒れ溶接も粗いが、門という低所からの落下であつたため分解は免れたと考えられる。

東北隅櫓は、本丸東北の搦手にあり糒を備蓄する櫓で、接続する多門にも非常用の食料が備蓄されていた。東北隅櫓とその下の東北一之門は天皇おわします御殿の裏手にあたり、この鯱の配置にも内匠寮の配慮が感じられる。

以上名古屋城に現存する銅鯱について、かつての所在場所を推定した。小天守鯱については今後さらに検討を要するが、昭和二十年の時点で銅鯱を戴いていた国宝建造物ほぼすべてについて、何らかの形で銅鯱遺品が今に残ることになる。

四 名古屋城以外の地で現存する江戸城鯱

旧江戸城銅鯱は、名古屋城以外の機関にも所蔵されている。それらの詳細は改めて検討することとし、ここでは概略のみ触れておく。

1 皇居東御苑内銅鯱 一基

旧江戸城大手門渡櫓鯱として、東御苑内の枡形に銅鯱一基が設置されている。「明暦三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」という名古屋城正門鯱と同じ銘があり、明暦三年（一六五七）の大火灾後の正俊の作とわかる。

大手門は、関東大震災で損壊し石垣から積み直された後、第二次世界大戦で焼失し、昭和四十三年に再建された。昭和五十五年、東御苑入苑者五百万人突破記念行事として今の場所にこの銅鰐が設置された。様式は名古屋城正門鰐とほぼ等しいが、全体的に躍動感と柔らかみがあり、銘の字体は明確である。正俊鰐の初発例の一つである可能性が高い。

2 靖國神社所蔵銅鰐 一対二基

靖國神社遊就館の傍らに建つ靖國会館（旧国防館）の正面大階段の上に、銅鰐一対二基が据えられている。正面に向かって左に「明暦三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」、右に「萬治元戊戌年 晚秋 吉日 渡邊銅意入道作」の銘があり、一年を置き正俊が作ったことになる。

靖國神社様の御教示によれば、明治十五年二月十日、旧江戸城に保管されていた兵器類が砲兵第一方面により遊就館に移された時あわせて保管されたと考えられるという。昭和九年の国防館竣工時に設置され、その後一時撤去され、今はコンクリート土台に安置されている。⁽¹¹⁾

二基を比較すると細部表現がかなり異なつており、たとえば、万治元年銘鰐は眉下の幅が狭く四角錐が扇状に配されている。明暦三年銘鰐は皇居東御門の鰐と近く、初発的作例と考えられる。なお万治銘の左腰鰐は後補と思われる。

3 東京国立博物館所蔵 一対二基 明暦万治型

二基ともに「萬治二己亥年五月 銅意法橋作 同子 渡辺近江大掾源正次」の銘があり、名古屋城表一之門鰐の一年前に正俊正次父子が作ったものと知られる。陸軍省からの寄贈と伝えられている。本型による制作で同型同寸と紹介されているが、法量・様式が異なつており、片方は全体に細く造形・銘書体も鋭い。成形方法を含め今後の検討課題を残す。

五 作者について

明暦万治型の鰐を制作した渡辺正俊・正次父子については、香取秀真の一連の論考により伝歴・作品が紹介されている。⁽¹³⁾ 正俊（正駿）、すなわち渡辺銅意は、おそらく京都出身で、江戸に下向し浅草に住み、承応二年（一六五三）には尾張徳川家二代光義らが日光大猷院に献納した燈籠四基を作り、明暦大火後、江戸城鰐や市中の擬宝珠を制作した。寛永十五年（一六三八）に「洛陽治工源正俊渡辺銅意作」、慶安二年（一六四九）に「工鑄銅意」、承応二年に「渡辺銅意正俊」、明暦三年初冬に「銅意入道正俊」、万治元年十二月に「御鑄物師渡辺銅意法橋」を名乗つており、明暦三年に剃髪し、大火後の活動の中で法橋位を叙任されたことがわかる。子の正次の菩提寺である日蓮宗法立寺（弘前市新寺町）の過去帳から、寛文二年（一六六二）没と知られる。

近江大掾正次は、正俊を父として正保三年（一六四七）に生まれた。万治元年銘の作例が初出作となる。父との合作銘のある鰐の他、擬宝珠、燈籠、天水桶等を作った。正俊が没した三年後の延宝八年（一六六五）、津軽藩の御鑄物師となり、切米三十俵を与えられた。多くの作品を藩命で作り、宝永元年（一七〇四）、五十九歳で弘前に没した。

正俊は相馬中村家と関係があつたらしく、江戸城再建時相馬家が担当した二之丸門、汐見坂門などの銅鰐が正俊にまかされた。正俊の子の正次が津軽に赴いたのも何らかの縁があつたのかもしれない。⁽¹⁴⁾ また江戸城銅鰐制作は正俊が法橋叙任にいたる契機であり、子の正次を引き立てる重要な場にもなつたと考えられる。

正俊・正次以外の作者については、現時点では不明であり、江戸後期の江戸城再建と幕府御鑄物師についての検討が必要と考えられる。

六 結語 一なぜ江戸城銅鰐を名古屋城に移したか

明治四十三年になぜ名古屋城各櫓等の瓦鰐を廃し、江戸城銅鰐を移管したかという根本的問題については、本稿では検討できなかつた。今後江戸城銅鰐の保管と名古屋離宮の管理という双方から検討していきたい。

ただ、離宮管理の上で、離宮としての利便性確保や美観追及と江戸期城郭の永久保存との一見矛盾する二目的があつたことを特記したい。

名古屋離宮内の瓦鰐は、実は明治二十九年八月三十日・九月九日の暴風雨で大破し、地元瓦師により新造・修理されていた。その際「在来の形に倣つて」作るよう仕様書で指定されていたが、それら瓦鰐は信長・秀吉以来の縦に長い瓦鰐であったと考えられる。¹⁵しかしながら江戸城の銅鰐は、甲良家図面にある通り名古屋城天守金鰐と同じく頭部が大きいわば近世型、家康型であり、明治四十三年、宮内省は、縦長でしかも修復された瓦鰐より、日々見慣れた宮城の銅鰐、すなわち家康・江戸城式であり明治期は大手門などに現存していた銅鰐の方が離宮にふさわしいと見なした可能性がある。また瓦より青銅の方が制作費が嵩み格上といふ考えも当然あつたであろう。

その一方、明治二十九年の工事録において、「在来の形に倣い」という文言が鰐補填工事以外でも散見される。たとえば暴風復旧工事の一環で補填された上洛殿入側の花欄間は「在来之彫刻ニ倣ヒ組立」てるよう指示され、また同年の表書院の不足襖新設工事でも、「引手在来之形ニ倣ヒ取付ケ」と明記されている。表書院の襖新設工事については別稿で論じたいが、新規に作られた引手は驚くべきことに裏葵（六葉葵）の御殿引手であった可能性が高い。

従来「葵から菊へ」の一元論で論じがちであつた宮内省の離宮運営管理には、少なくとも明治二十九年の段階では、江戸期の名古屋城の意匠を保存する立場が厳然として存在した。それは名古屋城を「永久保存」すべきという明治十二年の天皇すなわち国家の方針に従うものに他ならず、利便性確保と永久保存との相反する理念の両立がきわめて現実的に図られていたと考えられる。

離宮運営については未調査の史料が多く、今後の史料調査により考察していきたい。

技法についての検討は筆者の能力を超えており、成分分析を含めた詳細な調査が必須である。また皇居に現存する鰐など、江戸城鰐總体についての広い視野からの検討も必要と考える。

いずれにせよ、名古屋城に今ある銅鰐は、旧国宝名古屋城建造物の遺品であり、離宮期そして空襲焼失という歴史を物語る。江戸城、そして江戸期金工史の貴重な遺品でもあり、その存在意義は計り知れない。

本稿執筆にあたり、多くの方から御指導を賜りました。とくに、金属工芸史研究会会員の方々には、数々の貴重な御指摘を賜わりました。厚く御礼申し上げます（敬称略）。

伊藤信一 一之瀬敬一 尾野善裕 久保智康 小林健一 小松邦好 佐藤寛介 柴田亮平 清水健 中川あや 西山加奈子 松本玲子 宮川楨一 山本悠介

宮内府長官官房総務課 宮内府宮内公文書館 東京国立博物館 東京都立中央図書館 京都国立博物館 山梨県立考古博物館

靖國神社

註

- (1) 鈴木博之『皇室建築 内匠寮の人と作品』一〇〇五年・一五一～一五四頁)。
- (2) 蓮池門移転工事については設計書との違いが「注意」されるなど詳細な監査を受けたが(宮内公文書館蔵「会計実況審査復命書 明治45年」)、「正門以外の銅鰐移設についての文書は経費決済を含め現時点では見いだせない。
- (3) 『明治天皇紀』。なお同書によれば、行幸翌年の明治四十五年、天皇は、名古屋離宮の「構造陰湿の感あるを厭い」離宮内の新殿舎建設を命じたが、直後に崩御された。本丸御殿は確かに南に土墨が迫り、風が通らない。
- (4) 乃木倉庫は明治一二年七月一〇日に起工され、同一二年一〇月一三日竣工。建築主任官基太村不二は当時の第三師団工役長歩兵大尉で、明治一〇年退役。
- (5) 『懷古国宝名古屋城』名古屋城振興協会 一〇〇〇年・名古屋城特別展図録『失われた国宝 名古屋城本丸御殿』(一〇〇八年)。
- (6) 113-3916「東一之門鰐」を、名古屋城表一之門北方銅鰐に、113-39-14「東一之門鰐」を、名古屋城表一之門南方銅鰐に、034-40-16「表一之門鰐(南方)」を、東北隅櫓北方銅鰐に、035-39-15「表一之門鰐」を、東一之門東方銅鰐に訂正。
- (7) 江戸城は、慶応四年(一八六八)から東京城、翌明治二年から皇城、明治二年から宮城、昭和二三年から皇居と名称変更されている。
- (8) 国立国会図書館蔵・長崎省吾関係書類のうち「明治四十三年工事費書類」。
- (9) 『重要文化財名古屋城西北隅櫓修理報告書』一九六四年
- (10) 東南隅櫓は昭和二八年度、西南隅櫓は、平成二三年～一五年度に修理。『重要文化財名古屋城西南隅櫓保存修理工事報告書』(一〇一五年 編集・著作公益財団法人文化財建造物保存技術協会・本文執筆編集団面作製 同協会大川畑博文)によれば、北鰐に「明治四十三年三月自東京城移之」、南鰐には同文に加え「御用達 野田平吉」とある。「名古屋離宮沿革誌」各隅櫓の項にも「明治四十三年 瓦鰐ヲ銅鰐へ取替」「七月竣工」等の記述がある。

(11) 香取秀真『江戸銅鰐名譜』(昭和二七年)に、「江戸城本丸屋上銅鰐(中略)(先に陸軍大臣官邸にあり)」として紹介される銅鰐二基は、靖國神社と同じ銘文を有している。陸軍大臣官邸は、昭和二十年の戦災焼失まで江戸城直下(現在の憲政資料館)にあり、その門辺に置かれていたことになる。

(12) 『青森県史 文化財編 美術工芸』 二〇一〇年

(13) 『日本銅工史稿』 大正三年、『金工史談』 昭和一六年、『江戸銅鰐名譜』 昭和二七年等。正俊・正次については、伊藤信二氏より指導いただいた。

(14) 野中和夫(『江戸城尾築城と造営の全貌』)一〇一五年。『相馬家記録 一御本丸内追手二之御丸鹽見坂富士見下蓮池喰違御門作事入用帳』に、「唐金鷗的(ママ)丸銅手間代銅意」とあるとされる。

(15) 宮内庁宮内公文書館所蔵「明治二九年 工事録」に、同年秋の暴風雨にかかる一連の修理記録がある、小天守の瓦鰐は後藤鉢三郎により新作された。その仕様書は「背イ四尺五寸」「在来之恰好二値ヒ各部總体上磨キ仕上ケニ製造致シ」「下リ棟其他損シ候分足シ」などと細かく定められ、二個で三万円が支払われた。また東南・東北・西南隅櫓の瓦鰐は、胴部は在来のままで腹鰐と腰鰐計二十四枚が交換された。

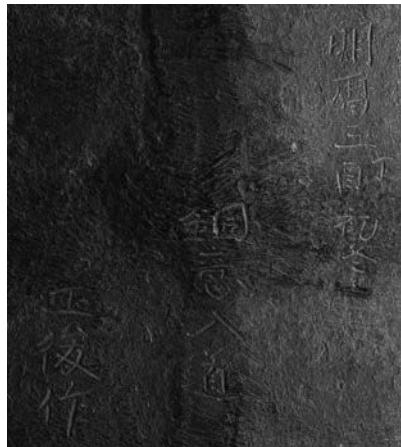
《Title》

Bronze Dolphins of Edo Castle and Nagoya Castle

《Keyword》

Bronze Dolphin, Nagoya Castle, Edo Castle, Nagoya Palace, Imperial Household, Army, World War II, Air raid

① 正門櫓 銅鯱



①正門銅鯱銘



①正門櫓銅鯱



ガラス乾板 14-37-06 正
門銅鯱



ガラス乾板 14-37-03 正門胴鯱



①正門銅鯱背面

③ 小天守 銅鯱



ガラス乾板 061-35-08 小天守銅
鯱 (西方)



現復元小天守閣銅鯱 (2021 年
撮影)



③尾鰭

② 表一之門 銅鯢



② 2 表一之門南方銅鯢



② 1 表一之門北方銅鯢



② 2 表一之門南方銅鯢 銘



② 1 表一之門北方銅鯢 正面口部部分



ガラス乾板 113-39-14 東一之門
(表一之門に訂正) 北方銅鯢



② 1 腰鰭

④ 東北隅櫓 銅鯱



④ 1 右 東北隅櫓北方銅鯱
右半身 表



④ 1 左 東北隅櫓北方銅鯱
左半身 表



④ 2 右 東北隅櫓南方銅鯱
右半身 表



④ 2 右 銘



④ 1 右 銘



④ 1 左 裏 (内側)



④ 2 右 裏 (内側)



ガラス乾板 125-03-09 東北隅
櫓銅鯱 (南方)



124-41-09 東北隅櫓銅鯱 (北
方)



125-03-09 東北隅櫓銅鯱 (南
方)

⑤ 東一之門 銅鯱



⑤ 2 東一之門西方銅鯱 「四十三貫目」銘



⑤ 1 東一之門東方銅鯱 「五十二貫目」銘



⑤ 2 銘



⑤ 2 正面



⑤ 1 銘



⑤ 1 背面



ガラス乾板 113-39-04 東一之門銅鯱



ガラス乾板 113-39-13 東一之門銅鯱



ガラス乾板 113-39-12 東一之門銅鯱

⑥ 西北隅櫓 銅鯱



⑦ 西南隅櫓 銅鯱



⑧ 東南隅櫓 銅鯱



皇居東御苑 銅鯱



靖國神社 銅鯱



東京国立博物館 銅鯱

画像提供 東京国立博物館資料館

1983年7月29日撮影



江戸城銅鰐一覧

令和3年12月現在 現皇居内は除く

通番	図版番号	仮称(現所在場所による)	型	移管時期・伝来	制作時期	作者	銘(特記ない限り頭部刻銘)	重量	主なガラス乾板写真(数字は整理番号)・修理履歴
1	①	名古屋城正門銅鰐	明暦万治型	明治43年 江戸城蓮池御門	明暦3年 (1657)	正俊	「萬治三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」	113.3kg	14-37-03正門鰐 14-37-06正門鰐 ただし両図とも北方鰐か
2	②1	名古屋城表一之門北方銅鰐	明暦万治型	明治43年	万治3年 (1660)	正俊・正次	「萬治三年庚子二月吉日 御鑄物師 銅意法橋 同子渡辺近江大掾 源正次」「明治四十三年三月自東京城移之」尾鰐「宮内省御用達 野田平吉 代人 田中嘉策」	232.0kg (内部木材等を含む)	113-39-16東一之門鰐
3	②2	名古屋城表一之門南方銅鰐	明暦万治型	明治43年	万治3年 (1660)	正俊・正次	「萬治三年庚子二月吉日 御鑄物師 銅意法橋 同子渡辺近江大掾 源正次」「明治四十三年三月自東京城移之」尾鰐「宮内省御用達 野田平吉 代人 田中嘉策」	168.4kg	113-39-14東一之門鰐
4	②1 鰐	名古屋城表一之門北方銅鰐 腰鰐	明暦万治型	明治43年	万治3年 か	正俊・正次	なし	9.0kg	
5	③鰐	名古屋城小天守銅鰐 尾鰐 下方か	小天守型	明治43年			貼紙「慶長 宝名 大修復 昭和二十年五月十四日灰燼に 帰」	4.5kg	061-35-08小天守閣銅 鰐(西方) 052-18-08小天守閣西 南面 048-18-19小天守閣東 北面
6	④1 右	名古屋城東北隅櫓北方銅鰐 左半身	縦二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之」	52.9kg	034-40-16表一之門銅 鰐 124-41-09東北隅櫓銅 鰐(北方)
7	④1 左	名古屋城東北隅櫓北方銅鰐 右半身	縦二分割型	明治43年			なし	52.1kg	
8	④2	名古屋城東北隅櫓南方銅鰐 右半身	縦二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之」	54.5g	125-03-09東北隅櫓銅 鰐(南方)
9	⑤1	名古屋城東一之門東方銅鰐	縦二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之」・尾鰐「五十二貫目」	136.1kg	113-39-04東一之門鰐 035-39-15表一之門鰐 113-39-04東一之門鰐 035-39-15表一之門鰐 098-04-08東二之門東 南面
10	⑤2	名古屋城東一之門西方銅鰐	縦二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之」・尾鰐「四十三貫目」	128.5kg	113-39-12東一之門鰐 113-39-13東一之門鰐 106-02-18東一之門南 背面 107-38-12東一之門南 西面
11	⑥1	名古屋城西北隅櫓北方銅鰐	明暦万治型	明治43年	万治3年 (1660)	正俊・正次	「萬治三庚子年二月吉日 御鑄物師銅意法橋 同子渡辺近江大掾 源正次」・尾鰐「明治四十三年三月自東京城移之」	未測定	
12	⑥2	名古屋城西北隅櫓南方銅鰐	明暦万治型	明治43年	万治3年 (1660)	正俊・正次	「萬治三庚子年二月吉日 御鑄物師銅意法橋 同子渡辺近江大掾 源正次」・尾鰐「明治四十三年三月自東京城移之」	未測定	
13	⑦1	名古屋城西南隅櫓北方銅鰐	横二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之」	未測定	大正10年・平成23~25 年度修理
14	⑦2	名古屋城西南隅櫓南方銅鰐	横二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之 御用達 野田平吉」	未測定	大正10年・平成23~25 年度修理
15	⑧1	名古屋城東南隅櫓北方銅鰐	横二分割型	明治43年			「明治四十三年三月自東京城移之」・「宮内省御用達 野田平吉 代理人田中嘉策」南北の別不明	未測定	昭和28年度修理
16	⑧2	名古屋城東南隅櫓南方銅鰐	横二分割型	明治43年				未測定	昭和28年度修理
A		皇居東御苑銅鰐	明暦万治型	旧江戸城大手門渡櫓鰐	明暦3年 (1657)	正俊	「明暦三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」	測定不可能	昭和55年現在地設置
B		靖國神社 靖國会館 北方 鰐(向かって左)	明暦万治型	明治15年か	明暦3年 (1657)	正俊	「明暦三丁酉初冬 銅意入道 正俊作」	測定不可能	
C		靖國神社 靖國会館 南方 鰐(向かって右)	明暦万治型	明治15年か	万治元年 (1658)	正俊	「萬治元戊戌年口(晚秋)吉日 渡邊銅意入道作」	測定不可能	
D		東京国立博物館 銅鰐	明暦万治型	伝陸軍省寄贈	万治2年 (1659)	正俊・正次	「萬治二己亥年五月 銅意法橋作 同子 渡辺近江大掾 源正次」	未測定	
E		東京国立博物館 銅鰐	明暦万治型	伝陸軍省寄贈	万治2年 (1659)	正俊・正次	「萬治二己亥年五月 銅意法橋作 同子 渡辺近江大掾 源正次」	未測定	